

アート作品における価値の共創に関する一考察

田村葉子

1 目的

この報告の目的は、経済的価値の側面からアート作品が価値を形成するメカニズムの可視化を試みることである。一般的にアート作品には、芸術的価値、社会的価値、経済的価値があるといわれている。これらの価値をはっきりと分けてみることは困難であるが、それぞれの側面からみることではできると考える。ゆえに、偏る可能性は否めないが、アート作品の価値の一側面である経済的価値つまり価格の上昇を、総合的な価値の高まりの判断指標とみることができると想定した。Becker は、作品制作活動にかかわる人々の場をアート・ワールド (Art Worlds) と定義している。そのなかで規則にそって作品が制作され、評価され、その評価によってさらに価値が高まるとしている。しかし、規則は共通する前提となっており、議論は限定的で全体像がみえにくい。

2 方法

そこで、アート作品にかかわるアクターの役割を明確にし、価値の形成に対して異なる視点からのアプローチを試みる。そのために、アーティストと市場との関係性が強くなったとみられる20世紀以降の比較的新しいアート作品を中心として、アクターの役割を本報告の視点から整理する。対象の場としては、主要オークションハウスの拠点がおかれているニューヨークに注目する。価値を生み出すアクターとしては、アート・ワールドにおける、制作者、販売者、保証者、購入者を想定し、先行研究における事例、新聞や雑誌の記事、アクターの手記などを用いてアクターの役割とアクター間の相互作用に注目する。そして、アクターが存在感を高めるためのふるまいが直接的・間接的に経済的価値を高めるという視点から、次の仮説を提示する。アート作品の価値は、アクター間の相互作用による「価値の発見」「価値の保証」「価値の普及・維持」によって形成される。その形成は各アクターの共創によるものである。本報告では、この仮説に、複数のアクターとしての役割をもつアーティストである村上隆が作品を制作・販売している実態を事例として適用し検証する。

3 結果と結論

分析の結果、アクターのふるまいは西洋中心主義に基づいており、価値を高めるためにはそこへつなげることが必要である。そして、つなげることによって、アクターはより「大きな」な存在になっていくこと、このふるまいは相互に作用していることを考察した。アート作品がこの相互作用のなかへ入るためには「価値の発見」がなくてはならないこと、発見後は「価値の保証」によって「価値の普及・維持」されることで価値が高まること「価値の発見」「価値の保証」「価値の普及・維持」には、それぞれに一次的、二次的な段階があること、これらも相互作用によって存在感が高まり「価値の共創」が成されていることを考察した。村上隆は複数のアクターとして、これらの場に積極的にかわり、自身の作品のさらなる販売へとつなげていること、村上自身が価値の共創を行って自身の経営する画廊所属アーティストの作品を販売していることを考察した。以上により、「価値の発見」「価値の保証」「価値の普及・維持」から「価値が共創」されているとみることが有用であり、経済的価値の側面からアート作品が価値を形成するメカニズムの可視化に貢献すると考えられる。

文献

Becker, Howard S [1984] 2008, *Art Worlds*, Los Angeles: University of California Press.
(=2016, 後藤将之訳『アート・ワールド』慶応義塾大学出版会.)